

にゃんこシッター

M a b i r o & S b i n y a

風

fuu

ternity



エタニティ文庫

もくじ

にゃんこシッター 5

書き下ろし番外編
信じ難い奇跡 343

にゃんこシッター

1 出会いは衝撃とともに

あー、参った。まさかあんなミスをしでかすとは……：
 金曜日の午後八時。会社のエントランスを出た中野真優は、なかのまの疲れの滲んだため息をついた。

というのは、週明けの会議で使う資料を作成し、最終チェックをしていたら……：なんと、数字ばかりが並んでいるページに『もやし』の三文字があったのだ。

実は昨日、仕事帰りにスーパーに寄ったら、もやしが三袋で三十円という破格の安値で売られていたので、真優は九袋も買い込んでしまった。シャキシャキしているうちに食べなきゃと思つて、もやしを使った料理のことばかり考えていたために、無意識に『もやし』と入力してしまったのだろう。

それを発見したとき、一気に血の気が引いた。上司に報告するべきだったが、声をかけられなかった。

なぜなら、このところ、社内のパソコンのシステムに不具合があり、業務に支障をきたすことが多く、真優の上司も、ひどくピリピリなさっておいでなのだ。そんな中、ミスをしたなんて、とてもじゃないが報告できない。だから、隠蔽ひんぺいという手段を取ることにした。

総務課の社員全員が帰ってから作り直したため、こんな時間になってしまった。

仕事中は、しっかり集中すべきだと、猛反省中だ。

わたしってば、なんて間抜けなの？

ともあれ、『もやし』のやつめえー、どう料理してやるるかあー。

行き場のない苛立ちには、罪のない『もやし』に向かう。

真優は明かりの消えた駐車場へと足を進めた。ここをまっすぐ抜けるのが駅までの近道なのだ。

この会社に勤めて二年になるが、いまだに車を持ってない真優は電車通勤をしている。会社からアパートの最寄り駅までは電車ですぐなのだが、残念ながら、最寄り駅からアパートまでが遠い。

なぜそんな不便なところを借りたかというのと、とつてもかわいかったのだ、建物の外観が。それに新しかったし……

娘の一人暮らしを心配した両親からは、もうちょっと駅から近いところにしたらと言われたけど、ここに住めるなら、どんな不便もいとわないと宣言して押し切った。

……で、現在、激しく後悔しているわけさ。ふっ。
虚しく笑っていると、メールが届いた。平沢由梨からだ。

由梨は同期で、入社直後すぐに親しくなり、いまでは親友だ。由梨はいま、ある男性に片思い中なのだが、メールによると、なんでも今日、その彼と言葉を交わしたらしい。彼女の片思いの相手は、専務の補佐をしている相田というひとだ。二十代後半で、見た目のいい彼は社内でも有名。恋のライバルが山ほどいるため、由梨は最初から諦めてしまっている。簡単に「頑張れ」なんて言うのは無責任な気がして、真優はただ話を聞くだけにしている。というのは、情けないけれど、真優はまだ恋をした経験がなく、助言するなんておこがましいと思っっているからだ。

由梨に返信するメールの文面を考えていると、背後から走ってくる足音が聞こえてきた。少し気になったものの、真優はメールをぶちぶちと打ち始めた。

ドン！

突然、激しい衝撃が真優を襲った。

ぶつかってきた相手は「わっ！」と叫び、一方、真優は地面に膝をつき、なんとか顔は手でかばったものの、胸をしたたか打ちつけた。

「うぐっ！」

痛くて、息ができない。

な、なんなの、この状況？

地面に突っ伏した真優の上には、体当たりしてきた男が乗っている。

「ちよっ……むぐっ」

文句を言おうとしたら、無理やり口を塞がれた。

「す、すまない！」

切迫した声で男が謝罪する。

な、な……なんで口を？

真優は恐怖で一瞬頭が真っ白になる。

「どうしても見つかるわけにはいかない。頼む、静かにしてくれ！」

切羽詰まった声に、真優は困惑した。

見つかるわけにはいかないって……どういうこと？ 誰かに追われているのだろうか？

このひと犯罪者なの？ それとも、犯罪者に追われているの？

ああ、もおっ、どうしていいかわかんないっ！

「……来ないな」

真優に覆い被さったまま、男がぼそりと言った。

真優は思わずむっとする。追手の様子を窺う前に、この体勢をどうにかしろというのだ。

ひとを下敷きにして、口まで塞いで……
「むぐぐぐ、むぐぐっ！」

必死に抵抗し、真優は『いい加減に、してよ！』と文句を言った。言葉にはならなかったが……

「あつ、すまない」

彼は、ずいぶんと申し訳なさそうに謝る。

えつ、なんか、意外な反応。思ってたより悪いひとはないってこと？

「あの、君……口を塞いでいる手を離すが……悲鳴は上げないでくれるか？」

なんとという身勝手な要請だと思っただが、ここはおとなしく頷いておくことにする。そのほうがきつと身のためだろう。

それに、追手の気配はなく、男は落ち着きを取り戻したようだ。このひとが何者かはわからないが、自分に危害を加える気はないとわかり、真優は少し安心した。

「君に謝罪をしたいんだが……けどその前に、場所を移動したいな。……なあ、俺におとなしくついてきてくれるか？」

いまだ口は塞がれていて、下敷きにされている。見知らぬ男にびったりくつつかれたままでいたくない。抵抗する意思はないと伝えるため、真優は自由の利く限り、大きく首を縦に振ってみせた。すると男は、まず真優の腕を拘束したのち、口を塞いでいた手

をゆっくりと外す。

この場に妙な緊張が生じた。

助けを呼ぼうとして、真優が悲鳴を上げるんじゃないかと、男は警戒しているらしい。言いつけ通りに静かにしていると、男は安心したようで、ふーっと息を吐き出した。

「ありがとう」

お礼を言われ、真優はびっくりした。先ほどまでの切羽詰まった調子とは違い、とても好感のもてる声だったのだ。

男は真優を立ち上がらせるために、手を貸してくれた。けれど、すぐにまた腕を掴まれた。拘束を解くつもりはないらしい。

離してくれと言いたかったがやめておく。不必要に刺激するのは危険だ。

真優は用心深く男を観察した。暗さに目が慣れてきて、彼の顔が見える。

視線が合い、真優は思わずビクンと震えた。

「安心してくれ。本当に何もしない」

男は言い聞かせるように言ったあと、真優の腕を掴んでいる自分の手を見つめる。

「君が逃げないと確信が持てたら……この手を離すんだが……悪いな」

と、すまなそうに言う。彼がどんな人間か、まだわからない。追われて逃げてきたということは、犯罪者の可能性もなくはない。

でも、会社の駐車場であつたのだから……

「あの……あなたは、この社員ですか？」

おすおすと聞くと、彼は沈黙してしまった。なぜかじつと真優を見つめてくる。

……な、なんなの？

「あの？」

「い、いや……ちが……。あつ、君、膝を擦りむいてるんじゃないか？」

彼は慌てたように言いつつ、真優の前にしゃがみ込む。あれほどしっかりと掴んで腕をあつさりとし、真優の膝を確認した。

え、えーっと……いいのかな？ 逃げないと確信が持てるまで離さないんじゃないかなの？

彼に言われて気づいたが、確かに右膝がジリジリと痛む。

膝を覗き込んでみると、ストッキングが破れている。ずいぶんみともないことになっているようだ。

「ちよ……ちよっと、み、見ないでください」

恥ずかしくなった真優は、男から慌てて退いた。こんな足、男性に見られたくない。

「あ、あの、追われてるんですか？」

そう問いかけると、男はしゃがみ込んだまま、顔を上げてきた。彼が口を開きかけた

そのとき、真優は救急車のサイレンが聞こえるのに気づいた。音のするほうに身体を向ける。するとまた腕を掴まれ、ぐいっと引つ張られた。

「な、何？」

「君はここの社員なんだよな？」

「そ、そうですけど」

ビクビクしながら答えると、彼は真優の腕をパツと離した。

「ごめん。そんなに恐がらなくていい。君に危害を加えたりはしない。約束する」

「は、はあ」

「理由は話せないんだが……危うく見つかりそうになって逃げてきたんだ」

「も、申し訳ないんですけど……その説明だと、あなたは悪いひとのようにしか聞こえないんですけど……」

真優が恐る恐る告げると、彼は顔をしかめる。

「そう……だよな。……だが、どうしても詳しくは話せないんだ」

「あの、あなたのことは誰にも言いませんから……わたし、もう帰りたいんですけど」

「あ、ああ……そうか。だよな」

彼はためらいながらも頷き、エントランスのほうを気にする素振りをする。

このひと、どうしてさっさとここを立ち去らないんだろう？ 追手が来ないとは限ら

ないのに……

「あの、逃げないんですか？」

「なんだか心配になり、声をかけると、彼は困ったような表情を浮かべる。

「何か、気になることでもあるんですか？」

「うん……その……友人のことが、気になって……」

友人？ このひと、仲間がいたのか？

「仲間のひと、逃げ遅れたんですか？」

そのやりとりをしている間にも、救急車のサイレンの音はどんどん近づいてくる。真優はサイレンのする方向に視線を向けた。すると男もつられたように、同じ方向を向く。

「いや、そういうことではないんだ」

改めて会話を続ける。

「そいつは、この会社の人間で……」

サイレンの音がびたりとやんだ。どうやら、目的地に到着したらしい。ついつい、救急車を探してしまう。

「あ、あらっ？」

「あっ！」

真優が叫ぶのと同時に、彼も叫ぶ。なんと、救急車は会社のエントランスに横づけし

たのだ。

救急の患者が、この会社の人間だったとは……一体誰だろう？

「まっ、まさかな……」

焦ったように男が吹き、真優の腕を掴んできた。

「なっ」

「隠れよう。見つかるはずない」

「わたしは隠れる必要ないんですけど」

「そう言わずに、もう少し付き合ってくれ。怪我をさせてしまったし……詫言ひがしたい」

返事に迷っていると、彼に引っ張られてしまい、なぜかふたりで黒い車の陰に隠れた。車の窓越しに様子を窺う。

待つこと数分、担架に乗らされたひとが隊員たちの手によって運ばれてきた。スーツの男性がふたり付き添っている。ひとりは由梨の片思いの相手、相田のようだ。もうひとり……副社長の補佐の村形さんっぽいけど……？ ……ということは、彼らの上司が倒れたのだろうか？

ドキドキしていると、男が舌打ちをした。思わず顔を向ける。

「まさか……」

「ま、まさかって？」

「あ……いや……なんでもない」

彼が口ごもっている、携帯のバイブ音がした。真優のものではない、彼の携帯だ。おもむろに携帯のメールを確認すると、彼はずいぶんと渋い顔をした。

よくない内容が書かれていたのだろうか？

救急車は再びサイレンを鳴らして去っていった。一体誰が運ばれていったのか気になるが……たぶん、月曜日に会社に行けばわかるだろう。

エントランスに群がっていた野次馬がいなくなり、辺りは静かになった。

「俺の友人かもしれない」

男が潜めた声で言う。ひどく沈痛な面持ちをしており、真優はどきりとした。

「えっ？」

「運ばれてったやつ」

「どうしてそう思うんですか？」

「連絡がないからさ。俺が無事逃げられたか、確認してこないわけがないのに……」

「いまのメールは、そのひとからじゃなかったんですか？」

「いまのは、俺の姉貴から」

「お姉さん？」

「なあ、君」

「はい？」

「車で自宅まで送らせてもらえるか？」

男は身を隠している黒い車を指しながら尋ねる。

真優は答えに迷った。その申し出はありがたい。なんせ、転んだせいで膝に血は滲んでいるし、ストックキングはビリビリ。こんな姿で電車に乗って帰るのは、ものすごく恥ずかしい。

でも……知らない男のひとの車に乗るっていうのは……さすがに……

「……そう……ですね」

「俺は信用ならないか？」

真優は「そんなことは……」と口ごもる。まあ、そうんだけど……

「君の立場なら、信用できなくて当然だ」

男は腕を組んでしばらく思索していたが、突然声を発した。

「なあ、君ってさ」

「なんですか？」

「猫、好きか？ 苦手か？」

「ね、猫？ ずいぶん唐突ですね」

「差し迫った事情があつてな」

「まあた、意味のわからないことを」
呆れたように言うと、男が噴き出した。

「君、面白いな」
くっくつと笑っている彼を見ていたら、自然と頬が緩んでしまった。
このひと、やっぱり悪いひとじゃなさそうだ。

2 突飛な依頼

「……猫は好きですよ」

真優は自然とそう口にしていった。

「そうなのか？」

真優の返事は、彼をとんでもなく喜ばせたようだった。

「実は俺、いま、ものすごく困った状況に陥ってるんだ」

「はい？ あなたがいま、困った状況にあるのは言われなくてもわかりますけど……」

「いや、そういうことじゃないんだ。そっちじゃないというか」

真優は眉を寄せた。

「これから姉貴ん家の猫を預かることになってるんだが、俺は猫が苦手なんだ。だから君、二週間、俺の代わりに猫の世話をしてくれないか？」

な、なんとも突飛な頼みだ。言葉も出ない。

「礼はたっぷりとさせてもらおう。頼むから引き受けてくれないか？」

よほど切羽詰まっているらしい。彼の必死な様子に、思わずほだされそうになる。

ダ、ダメダメ……

「む、無理です。……だって、わたしのアパート、ペット禁止だから」

「俺の家で面倒を見てくれればいい。そのほうが俺も助かる。姉貴のやつ、旅先から電話をかけてきて、元気な鳴き声を聞かせろなんて言い出しそうだから」

「お姉さん、ずいぶんかわいがっていらっしやるんですね」

「ああ、甘やかし過ぎだと思っけだな。だから、そりゃあもう、でっぶり太って……」
でっぶり？

丸々とした猫を想像してしまい、口元が緩みそうになる。もう、猫かわいがりしたくなるくらい、かわいいにゃんこちゃんなんだろうなあ。会ってみたいかもおっ。

マンチカンかなあ、ソマリかなあ、それとも、スコティッシュフォールド？
メ
インクーンでもいいけどおっ。

「あの、お姉さんのにゃんこちゃん、種類はなんですか？」

胸が弾み、勢い込んで尋ねると、彼に苦笑された。恥ずかしくなった真優は顔を赤らめた。

「話の続きは、車に乗ってからってことにしないか？」

くすくす笑いながら提案されたが、やっぱりまだためらいは払拭できない。このひとは信用していいような気がするんだけど……

「後部座席のほうがいいか？」

考えている最中に突然声をかけられて驚いた真優は、思わず首を横に振っていた。

「そう？ それじゃ、前に」

……ええい、もうなるようになれ！ 真優は残っていたためらいを捨て、助手席に乗り込んだ。

「ふうっ」

運転席に座ったところで、彼は大きく息を吐き、ネクタイを緩める。その仕草がひどくセクシーで、真優はどきりとした。

「ああ、すまない。ネクタイとか、俺、あまり馴染みがなくて……窮屈なもんだから……つい」

「い、いえ。構いませんで、どうぞ」

何が『どうぞ』なのか、自分でもよくわからないが……自然とそう口走ってしまっ

いた。

「あの……じゃあこれから予定を変更して、姉貴のところに向かっていいか？」

「えっ？ わ、わたし、まだ引き受けるとは……」

「リンを見てから引き受けるかどうか、決めてくれればいい」

彼は真優の返事も待たずにエンジンをかけ、車を発進させる。彼女は慌てた。

「あ、あの……で、でも……」

にゃんこを見てしまったら、断りづらくなっちゃうのに……

それにしても、このひと強引すぎる。そんなに猫の世話が嫌なのだろうか？

「そんなに苦手なのに、どうして引き受けることにしたんですか？」

「姉貴の旦那がいま海外赴任してて、もうすぐ四ヶ月になる。なかなか戻ってこれないみたいで……だから姉貴が会いに行くことになったんだ。実はまだ新婚ほやほやでね」

「結婚してすぐ離れ離れなんて……可哀想です」

「俺もそう思う。だからまあ、引き受けることにしたんだけど……俺はリンとはソリが合わないから不安でね」

「にゃんこちゃんの名前、リンちゃんって言うんですか？」

名前を知ったことで、真優の脳内のにゃんこ像はさらにリアルなものになっていく。

「そうだ、種類を聞かれてたんだっただな。えーと……何度か聞いたんだが、長ったらし

い名前で……ノルウェー……なんとかって……ダメだ、思い出せないな」

「あつ、わかります。ノルウェージャンフォレストキャットでしょう？」

彼は呆気にとられた顔をしたあと、噴き出した。

「君、すごいな。そうそう、そんな名前だったぞ。……それにしても、君ってほんと、猫が好きなんだな」

「だって、にゃんこってかわいいじゃないですか。……あつ、でも、あなたは苦手なんですよね」

そう言うと、彼は困ったような顔をした。その表情に、なぜか鼓動が速まる。

「あの……他に預けられる人はいないんですか？ ご両親とか」

「両親がいま住んでいるマンションは、ペット禁止なんだ」

「ペットホテルとかは？」

「以前預けたことがあったらしいんだけど、ストレスがたままって、大変なことになったらしい」

そうなのか……かなり繊細な猫ちゃんらしい。真優の脳裏に、いたいけなにゃんこが浮かぶ。

「だから、猫好きの君が世話をしてくれたら、本当に助かる」

そう言われると……

「そういえば……名乗るの、忘れてたな」

「あ……ああ、そういえば、そうですね」

「猫の名前やら種類やらの前に、自己紹介すべきだった。俺は、藤枝慎也。君は？ 教えてもらえるか？」

「は、はい。わたし、中野真優です」

「まひろ？ へーっ、どういう字を書くんのだ？」

「真実の真に、優しいの優です」

ちらつとこちらを向いた彼にふつと微笑まれ、真優は戸惑った。なんだかその笑みに、含みを感じたのだ。彼はその様子に気づき、慌てたように説明してくれる。

「ああ、すまない。俺、ひとが自分の名前をどんなふうに表示するのか……興味があつて」

慎也の言っていることが、いまひとつ理解できず、真優は「名前を……表現？」と口にして、首を捻る。

「いま君は、自分の名前を、真実の真に、優しいの優と言ったろ？」

「は、はい。あの、それが？」

「真剣の真に、優秀の優と言ってもいいわけだけど……君は、いつもさつきと同じように答えてるんだろ？」

「ああ、確かに……いつもそう言ってます」

慎也は頷き、さらに話を続ける。

「たいがい親がそう教えるんじゃないかな？　つまり親は、子どもにそうあれと望んでいるってことだろうと思っただけ」

真優は感心した。彼の言うとおりかも。まあ、自分が真実、優しいひとになれているかは別として……

「それじゃ、しんやさんは……あつ、そ、そう呼んでも？」

「構わない。俺も真優さん……いや、もういっそ呼び捨てにしてもいいか？　俺も慎也でいいから」

よ、呼び捨て？　いきなりハードルが高いけど……

「も、もちろん、わたしのことは好きに呼んでもらって構わないです」

「うん。それじゃ、真優」

「は、はいっ」

名前を呼ばれ、心臓が跳ねる。男のひとに名前を呼び捨てにされるなんて、初めての経験だ。

「あの、それで、あなたの名前の漢字は？」

「俺は……」

なぜか慎也は口ごもる。そして、ちらりと真優を見て、にやっと笑う。

心臓がトクンと高鳴った。

こういう状況に慣れていないから、緊張しているのかな……ちよつとしたことにいちいち過剰に反応してしまつて……わたしときたらまったく恥ずかしい。

「慎也の慎は、慎重の慎と説明しやすいんだが、『や』のほうかな」

「そんなに説明しづらい漢字なんですか？」

頭の中で、『や』と読む、難しそうな漢字を思い浮かべながら言うと、慎也がおかしそうに笑い出した。彼の笑い声が真優の胸に奇妙な具合に響き、戸惑った。

このひとの声って、低音のせいかな、胸に響くみたい。

「逆だよ。すごく説明しやすいんだ。ひらがなの『せ』、みたいなやつ」

一瞬困惑した真優だったが、すぐに笑いが込み上げてきた。くすくすといつまでも笑っている、頭をコツンと小突かれた。

「笑い過ぎ！」

「だ、だって。慎也さんが悪いんですよ。どんな難しい漢字なんだろうと思うじゃないですか」

「確かに」

慎也も笑い出した。どうにも胸がくすぐったい。

「それにしても、真優っていい名前だな」

「そ、そうですか？ そんなふうに言われると、照れます」
 「名前って、大きいよな。名前から受ける印象で、そのひとの性格を判断してしまうこともある」

「ああ、誠の文字を使っていると、誠実なひとだとイメージしてしまうみたいなことですか？」

「そうそう。小説の主人公でも、ユークイっていう名前のヒーローには、強い敵に果敢かかんに挑むことを期待したり」

「ああ！ なんてしたっけ、その小説！」

それから、互いの好きな小説の、登場人物の名前で話が盛り上がった。

「ほんと面白いですね。登場人物の名前だけで、こんなに話が弾むなんて思っていますんでした」

「俺も驚いた。小説の趣味が似てたつてもあるんだらうけど」

好意的な言葉に、胸がぐすぐつたくなってしまふ。

「姉貴の家まで、もうすぐだから」

助手席から見える景色は暗く、ここがどの辺りなのかさっぱりわからない。

「あのさ」

「はい？」

「……聞かないのか？」

「えっ？ 何をですか？」

「その……もちろん、さっきのこと……俺が逃げてた理由……」

ああ、そういえばそうだったと思ひ出す。

「どうして逃げてたんですか？」

ストレートに聞いたなら、慎也がぐくぐくす笑い出した。

「あの……何がおかしいんですか？」

「いや……その……ごめん」

慎也は気まずそうな顔をした。

「別に謝らなくてもいいですけど……」

「あの、とにかく俺は……犯罪者ではないからな」

「それじゃ、追われていたのはなぜなんですか？ 救急車の近くにいたふたりに追われ

ていたんですか？ ……そういえば、救急車で運ばれたのって……?？」

真優は慎也を見つめた。

「あなたの友人だったんでしょう？ 連絡が来ないって……」

「たぶん……そうだと思う」

「い、いいんですか？」

「そう言われても……俺にできることはないしな。……いずれ連絡をくれると思う」
 淡々と語っているが、慎也の表情からは不安が伝わってきた。
 「きつと大丈夫ですよ。救急隊員のひととか、相田さんたちも、そんなに慌ててる感じじゃなかったし」

「そうだな……真優、ありがとう」

改まってお礼を言われて、真優は顔を赤らめた。

3 暗号に困惑

「それで話を戻すけど……リンのこと、引き受けてくれるか？」

「で、でも……明日明後日の休日はいいですけど、月曜からは仕事がありますし……いえ、あの、それ以前に、慎也さんのところに泊まるなんて、やっぱり無理ですよ」

「俺は信用できない？」

「そ……そう言われると……困りますけど」

「俺の家、けっこう広いんだ。ちゃんと空き部屋もある。そこを君に提供しよう」
 どんどん話を進める慎也に、真優は慌てた。

「ですから、男のひとの家に泊まるなんて……」

「……そうか、よし。なら、君が安心できるように手を打とう」

手を打つ？

すると彼は、路肩みかたに車を停め、携帯を取り出した。

一体誰にかけるつもりなのだろう？

「いまだどこにいる？ ……ああ、そうか。ちようどいい。今夜泊まってくれ」

今夜泊まってくれなんて……どう考えても電話の相手は慎也の恋人だろう。

「ああ、これから人をひとり連れて帰るけど、今夜から泊まり込むことになるから」
 その言葉を聞いた真優は、目を見開いた。

ちよ、ちよっと待って！ どういうこと？

まさか、慎也さんの恋人のいる家に、わたしが猫の世話係として行かなきゃならないっていうの？

慎也と彼女が仲睦なかぢまじくしている隣で、猫を世話している自分を想像し、顔が引きつる。
 じよ、冗談じゃない！ そんな状況、耐えられない！

「あ、あのっ！」

断ろうとすると、手で制された。慎也はそのまま電話の相手と話し続けている。

会話中だから、黙っていてくれということなんだろうけど……

「ああ、そうだ。それで、ミツシヨン、ピンハナワン、ロンクロ、完全体で頼む。聞き取れたか? ……まあ、ロンクリでもいいさ。それと、俺の部屋の隣の部屋、できる限り片づけといてくれ。ああ、それと……ちょっと待っててくれ」

高圧的な話しぶりで相手に指示を出していた慎也が、急にこちらに顔を向けてきた。暗号のような言葉に困惑していた真優は、慎也と目を合わせて眉を寄せた。

「夕飯、まだだよな?」

「は、はい」

戸惑いながらも答えると、慎也は頷いて「俺のところで準備させようかと思ってるんだけど……」と言う。

「あの、リンちゃんのお世話なら、その方にしてもらいたいんじゃないんですか?」

真優は携帯を指さして言った。

「こいつは猫アレルギーなんだ」

慎也は携帯の送話口を押さえて、声をひそめて言う。

ね、猫アレルギー?」

「だ、だからって……わたしが……」

「君しか頼れないんだ。頼む。その代わり、たつぷりと礼をさせてもらう」

たつぷりと礼?

「たつぷりですか?」

確認すると、慎也は「ああ」と、事も無げに答える。なんだか、無性に腹立たしい。

よし、みてなさい。仰天させてやる。

「なら、新車をください。淡いピンクの軽自動車がいいです。それがダメなら……」

「わかった。それじゃ、決まりだな」

へっ? な、何?

わ、わかった? わかったって、何が?

「夕食ふたりぶん頼む。……いや、まだ寄るところがあるから一時間後くらいだな。それじゃ、頼んだぞ」

通話は終わったらしい。

「あ、あのおく、いまのは、じょうだ……」

「俺さ!」

真優の台詞を、慎也は鋭い口調で遮った。ぎよつとした真優は言葉を失い、彼を見つめる。

慎也は凄みのある目つきをし、ぐっと顔を近づける。心臓が飛び出すんじゃないかと思うほど、ドキドキした。

「冗談……嫌いなんだ」

目を眇めて、マジ顔で囁かれる。真優は泡を食った。

こ、このひと……話しぶりは俺様でも、根はやさしいひとだと思ってたのに……ちょ、ちよつと違ったのかも。

「で？ 君……いま何か、俺に言うところだったようだが？」

これだけ脅されて、冗談で言いましたと言えるひとがいるなら、ぜひお会いしたい。けど、まさか、本気でお礼に車をくれるつもり……じゃないよね？

だって、猫の世話を二週間するだけ。あつ、もしかしたら玩具のミニカーとかでごまかす気なんじゃ……

わたしはミニカー一個のために、にゃんこシッターを二週間も引き受けることになっちゃったのか？

いっやーっ！

「ひとつ言っとくけど……」

心の中で盛大に悲鳴を上げていると、慎也が話を切り出してきた。

こ、今度は何を言うつもり？

「な、なんでですか？」

真優は顔を引きつらせながら尋ねる。

「いまの電話の相手は俺の彼女とかじゃないから、誤解しないように」

「慎也は真顔で言い、真優の反応を窺ってくる。

「……」

「何か返事をしてくれないか？」

「いえ……なんて言えばいいのかわからなくて」

「君、彼氏とかいるのか？」

「……」

真優はまた黙り込んだ。

なぜそんなことを聞くのだろう？

「もしいるのなら、こんな頼みごとをしちゃ、彼氏に悪いからな。それで、いるのか？」

あ、ああ、そういうことか……

「いたら、にゃんこのお世話、しなくてもいいんですか？」

そう言うと、慎也は顔をしかめて口を開いた。

「君に彼氏がいるかいらないか、聞いてるんだけどな」

なかなか質問に答えない真優に苛立ったようだ。思ったよりも短気みたいだ。それでも、不思議と怖さを感じない。

「いまの電話の相手、ほんとに慎也さんの彼女じゃないんですか？ 慎也さんと彼女さんがいるところに泊まるなんて、身の置き場ないですし……わたし、ほんと嫌ですから」

「違う。それに俺、フリーだから」

へーっ、こんなにかっこいいのに……彼女がいないのか。フリーだなんて、ちょっと嬉しいかも……

「それで？ 真優、引き受けてもらえるか？」

そんな必死に頼み込まれたら、期待に添そいたくなるじゃないか。

「わかりました、引き受けます」

いくばくかの不安を胸に残しながらも、真優は答えた。

「ほんとか？ 助かる」

ほっとした笑みを浮かべられて、嬉しくなってしまった。

泊まり込みになるとはいえ、慎也とふたりきりというわけではない。それが嬉しいのか残念なのか自分でもよくわからない。でもまあ、なんにしても、かわいいにゃんこのお世話ができるのだ。

二週間限定のにゃんこシッターか。楽しみかも。

真優は途端にワクワクしてきた。

「でも、わたしも仕事があるので、つきつきりではお世話できませんよ」

「平日の日中だけなら、世話してくれそうな奴らがいる」

「えっ？ 世話してくれそうなひとが複数いるんですか？ なら、そのひとたちに」

「だから、そいつらを頼れるのは、平日の日中だけなんだ。猫の世話をしてほしいから泊まってくれなんて言ったら、たぶん殴られる」

な、殴られる？

「なんか、過激ですね」

「で……君はフリーなんだな？」

改めて確認され、真優は頷うなずいた。

4 儂はかなく散った夢

真優は洒落しやれた一戸建ての家を見上げた。

ここが、慎也さんのお姉さんの家か……

駐車場には普通車と軽自動車が停まっている。慎也は塀へいの前に車を停めた。車から降りる慎也を黙もくって見ていると、彼がこちらを振り返ってきた。

「どうした？」

「は、はい？ どうしたって、なんですか？」

「いや、君も一緒に行くんだろ？」

「いえ、わたしはここで待っています。わたしのことは気にしないでいいので、慎也さんごゆっくりどうぞ」

リンちゃんを引き取ってくるだけじゃなくて、姉弟で話だってあるだろう。赤の他人がついていく必要はない。だいたい真優は足を怪我して、みっともないことになっている。他人様の目にさらしたくない。

「君自身を見てもらったほうがいいと思うんだ」

「わたしを見てもらう……?」

「どんなひとが面倒を見てくれるのか、飼い主としては気になるんじゃないかと思うんだ。君に会えば、姉も安心する」

ああ、確かにそうかもしれない。もし自分が逆の立場なら、会っておきたいと思うだろう。

「で、でも……この格好で出ていきたくないんですけど……」

そう言うと、慎也はハッとして顔をしかめた。

「ごめん。すっかり忘れていた」

慎也は慌てて助手席側に回り込んできた。そしてドアを開ける。

「すぐに手当てをしよう。姉に頼むから……ほら、行こう」

「いえ、いいですよ。慎也さんのお姉さんに、そんなご迷惑をかけては……」

「いいから」

慎也は真優の腕を掴み、強引に外に引っ張り出そうとする。彼女は仕方なく車から降りた。

「これは、ひどいなー」

真優の足を見た慎也が叫んだ。彼の大声につられて真優も自分の足を見ると、門燈もんとうの光ではつきりと確認できた。

血まみれになっていて、まるで大怪我をしているかのようだ。でも、そんなに痛くないし、実際はそれほど深い傷ではないはずだ。たぶん手当てもせずに車に乗っていたから、その間にストッキングに血が滲にじんでしまったんだろう。

「は、早く手当てを……いや、病院のほうがいいか?」

早口でまくしたてる慎也を、真優はなだめた。

「痛くないです、全然。病院なんて行く必要ないです。ひどく見えるだけです。あの、それより……もしかすると車のシートが血で汚れちゃったかも。そっちを早く確認したほうが……」

助手席を確認しようとした真優は、強い力で手を引かれる。

「そんなのどうでもいい。いいから、来い」

慎也は真優を強引に家の門まで引きずっていく。

「真優、ほんと悪かったな」

表札の下にあるインターフォンを押しながら、改めて謝罪され、真優は首を横に振った。「大丈夫ですってば。そんなに痛くないですし、きっと小さな傷ですよ。この血を拭いたら、慎也さん、拍子抜けしちゃいますよ」

安心させようと笑顔でそう言うのと、慎也が真優をじつと見つめてきた。

彼と視線が合った途端、ドキドキしてきた真優は目を泳がせた。

慎也は「ふっ」と笑い、なぜか真優の頭に触れてきた。そして、髪をわしゃわしゃとされる。

「な、なんですか？」

どう反応したらいいのかわからない。

髪をわしゃわしゃにされたというのに、こんなにもドキマギしてしまうなんて……

「慎。遅いじゃないの。待ちくたびれちゃったわよ」

真優が困惑していると、インターフォンから責めるような女性の声が出た。

「姉貴のやつ」

インターフォンを睨みつけながら、慎也はむっとしてる。

「ひとにものを頼もうとするやつの態度じゃないよな？ 真優」

同意を求められても困る。

「あ……まあ、ノーコメントで」

苦笑しつつ答えると、慎也が面白くなさそうな顔をする。彼が真優に何か言おうとしたとき、玄関が開いた。

「何やってんの？ 早く入っていらっしやいな」

「ああ。いま行く」

慎也は真優の手首を掴み、玄関に向かう。真優は緊張しつつ彼についていった。

「あら、珍しいわね、あんたがスーツにネクタイだなんて……あ、あらっ？」

真優に気づいた慎也の姉は、戸惑った声を上げた。

「実は、俺のせいで彼女に怪我をさせちゃったんだ。姉貴、悪いけど」

「ま、まあっ！ ひどい怪我じゃないの。は、早く入って、ほら」

血だらけの足を見た慎也の姉は、慌てて家の中に招いてくれた。

十分後、真優の足には慎也の姉によって包帯が巻かれていた。

大袈裟とは思ったが、濡れたタオルで血を拭ってもらったら、意外と傷は広範囲に及んでいた。そこでガーゼを当てて、包帯を巻いてもらったのだ。けれどしよせん擦り傷だ、数日もあれば治るだろう。まあ、傷痕が完全に消えるまでには、時間がかかりそうだけ……

「ありがとうございました、お姉さん。すみません、お手間をかけてしまって」
 「何を言うの。あなたが謝ることないわ。この、ふつつかな弟のせいなんだから」
 「ふつつかで悪かったな」
 「あら、反論できるの？」

「いや……悪かったと思ってる。真優、ほんとすまなかった」
 「もういいですよ。結局、たいした傷でもなかったし……」

「たいした傷だったわよ。ねえ、どうしてこんな怪我を？ 慎、あんた彼女に何をしたのよ？ まさか、痴話喧嘩の挙句、カッとして突き飛ばしたんじゃないでしょうね？ そんなやつ、男の風上にもおけないわよっ！」

「勝手な妄想をして怒鳴らないでくれないか。そんなんじゃない」

「なら、どうしてこうなったのよ？」

「あ、あのっ」

口喧嘩を始めた姉弟の間に、真優は慌てて割り込んだ。

「わたしが転んでしまっただけなんです。ほんとに慎也さんは悪くないので」

「まあっ、真優ちゃん、健気ねえ。慎、あなたずいぶんとかわいい彼女見つけたじゃないの」
 か、彼女？

誤解されて焦った真優は、思わず慎也のほうを見た。彼も困った顔をしている。

「それじゃ、俺らそろそろ帰るから……姉貴、リンは？」

え？ どうして否定しないの？ 慌てる真優をよそに姉弟の会話は続いていく。

「いつ迎えにきてくれてもいいように、夕方からケージに入れておいたわ。もう、あの子、ケージが大嫌いだから、大変だったのよ」

ケージが嫌いかあ。リンちゃんは繊細なのね。

丸々としたノルウェージャンフォレストキヤットを思い浮かべて、真優は目尻を下げた。

「いよいよご対面だ。とんでもない流れで引き受けることになったが、かわいいにやんこと過ごせるのだ。めいっばい楽しんじゃおう。」

胸にぎゅっと抱きしめて、やわらかな毛に頬ずりして……そしたら、にやんこがぺろぺろっとほっぺたを舐めてきて、いやーん、もおっ、くすぐったーい……とかね。

むっふふーっ。

「……そんな話を聞かされると、俺たち、先が思いやられるな」

慎也はしかめっ面をして、疲れたように言う。そうだった、彼は猫が苦手なんだっけ。

「慎也さん、大丈夫ですよ。わたしがお世話しますから」

くすくす笑いながら言う、慎也から嬉しそうに声をかけられる。

「ありがとう、真優」

その笑顔はとんでもなく素敵だった。どきりとした真優は、慌てて視線を逸らす。すると、慎也の姉が、急に笑い出した。おかしくて仕方ないというように、腹を抱えて笑っている。

「姉貴、何を笑ってんだ？ 早くリンを……」

「だ、だってえ。あんたが女の子にデレデレしてる姿なんて初めて見たから。こんなかわいいところがあつたのねえ」

「あのなあ。……ま、まあいい。とにかくリンを連れてこいよ。早くしないと、俺たちこのまま帰るぞ！」

慎也が腹を立てている一方で、慎也の姉は笑いながら部屋を出ていった。

ふたりきりになり、微妙な空気が流れる。

「……なんか、姉貴を誤解させたみたいだ。悪い」

慎也が頭を下げる。

そんなしおらしい態度をとられると、先ほどまでの戸惑いはどこへやら、こっちが申し訳ない気分になってくる。わたしなんぞと恋人同士と誤解された挙句、デレデレしてるなんて言われて……

込み入った事情を説明するのも面倒になり、真優は彼の姉の前では恋人のフリをすることに決めた。

「わたしのほうこそ、すみません」

「は？ なんで君が謝るんだ？」

「だって……」

「お、お待たせ」

何やら苦しい慎也の姉の声を耳にして、真優は振り返った。

慎也の姉は、大きなケージをひどく重そうに抱えている。

へっ？

ケージの中を見て、真優は言葉を失った。

丸々としたかわいいにゃんこのイメージが、ガラガラと音を立てて崩れてゆく。慎也さんは「でっぷり」と表現していたけど……ま、まさにその通りだ！

「おいおい、姉貴。リンのやつ、また太ったんじゃないのか？」

「そんなことないわよ。前からこんなものだったわよ」

「リン、お前、すでに猫じゃないな」

ケージの中から自分を見つめているリンに、慎也が言う。

「にゃごーっ！」

獐猛どうもうそうな鳴き声に真優は震え上がった。明らかにリンは、慎也を威嚇いかくしている。むっ、むちゃくちゃ、こ、こ、恐いんですけどお。

こんなじゃんこ、とてもじゃないけど触れない。近づける気がしない。じゃんこを抱きしめて頬ずりする夢は儚く散り、ますますトンスラしたくなった真優だった。

5 切ない別れ

どうしよう？ どうしよう？ どうしよう？

リンちゃんが、こんな獐猛どうどうそうなにじゃんこちゃんだったなんて。

とてもじゃないけど、お世話なんてできないよお。

青くなっている真優の横で、慎也はケージを受け取った。その途端、リンの威嚇いかくっぷりはヒートアップする。

「姉貴、こいつもうちよつと、おとなしくならないのか？」

リンの鳴き声に、慎也は弱ったように言う。

「わたしと離れ離れになるのを感じてるんだと思うの。それで神経が過敏になっちゃってるのよ。リンはすごい繊細せんさいだから……」

慎也は重いため息をついた。

それから、さつさとここを去ろうと思ったのか、ケージを抱えて部屋から出ていった。真優は慌てて彼に続く。

「姉貴、リンの荷物は玄関にあるあれだな？」

玄関に向かいながら慎也が聞く。その大量の荷物は、真優たちがここに来たときには、すでに置いてあった。

リンは依然いぜんとして、わめきながら暴れている。あれではケージを抱えるだけでも大変だろう。

「ええ、そう」

慎也がリンを家の外へ運び出し、真優は玄関先の荷物に目を向けた。

「お姉さん、どれを運べばいいんですか？」

「ね、ねえ、真優ちゃん」

慎也の姉は声を潜めて話しかける。

「はい？」

「慎と、どこで知り合ったの？」

返事に困る。先ほど会社の駐車場で、突然後ろから突き飛ばされて知り合いました、なんて言えない。

「あいつ、家に引きこもってばかりいるから、彼女なんてできるわけがないと思ってた

のよ」

引きこもってばかりいる？ そうなのか？ とてもそうは見えない……というか、出会ったばかりのわたしに、じゃんこシッターをすると約束させ、強引にここまで連れてきたことを考えると、ぐいぐいひとを引っ張っていくリーダータイプの男性に見える。

「でもよかったわ。あなたみたいないい子が彼女になってくれて……」

「あ、ど、どうも」

「でも、あいつ、仕事はつかりでしょう？ ちゃんとデートとか連れていってもらえてる？」

「ああ……まあ、はい」

恋人のフリをすると決めたものの、どう答えていいかわからず、あやふやな返事になってしまう。するとそこに、慎也が戻ってきた。

「姉貴、リンの荷物はどう？」

「どれって、ここにあるの全部よ。お願いね」

「はあっ？」

荷物を見て、慎也が呆れた声を上げる。確かに相当な量だ。

「姉貴の荷物も混ぜているんだと思ってたよ」

「わたしの荷物は寝室に置いてあるわよ。リンのと、混ぜっちゃったら困るから」

そうだった。お姉さんは明日から、海外赴任ふにんしている旦那様のところに行くんだったね。

「明日、出発されるんですね。お姉さん、気をつけて行ってきてください」

「まあっ、真優ちゃんありがと。なんかもう初対面とは思えないくらい、親しみ感じちゃうわあ」

嬉しそうに言われて顔が引きつりそうになる。親しみを感じてくれているのは嬉しいが……ちゃんとリンのお世話ができるのか、はなはだ不安だ。

リンの荷物をやっとな車に運び終え、真優は後部座席に乗り込んだ。

真優の隣にはリンが入っているケージが置かれている。走行中にケージを支える任務を仰せつかったのだが……

正直、この任務にさえ怯おびえているわけで……

なんせ、リンは依然いぜん興奮いっけんしていて、ドスのきいた鳴き声を上げ続けているのだ。

「真優、大丈夫か？」

運転席に座った慎也が、申し訳なきように聞いてくる。

「大丈夫ですよ」

大丈夫ではなかったが、慎也と彼の姉を少しでも安心させたくて、真優は明るく答えた。

「わたし……やっぱりやめようかしら？」

車の外でふたりのやりとりを見ていた慎也の姉が言う。

「はあっ？ 姉貴、いまさら何を言い出すんだ」
 「そうですよ。旦那様、すごく楽しみに待っていらっしやいますよ。リンちゃんなら、わたしに任せて下さい。わたしは猫に好かれる体質なんです。リンちゃんだって、すぐに懐いてくれます」

言いつつ、この場を収めるためにつこり笑っておく。

きつとなんとかなる。なつてほしいっ！と、切実に祈っていると、リンがひときわ大きく鳴いた。驚いた真優は、ケージを支える手を離してしまった。豪語した手前、ものすごくいたたまれない。

「あの……真優ちゃん？」

ま、まずいかも。いままのでお姉さんの不安を煽ってしまったようだ。

「だ、大丈夫ですよお」

なんとか笑みを浮かべる。

「真優、目が泳いでるぞ」

運転席に座った慎也がほそりと呟いた。真優には聞こえたが、車の外にいる慎也の姉には届いていないだろう。

バックミラー越しに慎也を見ると、笑いを堪えているのがわかった。

「慎也さん！」

むつとして大声で呼びかけると、慎也は愉快そうに笑い出す。

だが、余裕な感じで笑っている慎也を見て、真優は不思議と気持ちが悪くなってきた。猫が苦手な慎也だけど、真優ひとりリンを押し付けることはしないように思えて、安心したのだ。

「真優ちゃん、ほんと迷惑かけちゃうと思うけど、リンのことよろしくお願いします」

「はい。任せて下さい」

今度は、自然と微笑むことができた。真優の笑顔に慎也の姉もほっとしたようだった。慎也がエンジンをかける。すると、鳴き続けていたリンが、ぴたりと静かになった。

真優は驚いてリンを見つめた。

「ついに諦めたか」

「そうだと思う。もう無理だつてわかったんだわ。リンはすごく頭がいいのよ」

慎也の姉は苦笑混じりに言ったが、その声は微かな震えを帯びている。真優もじわつと涙が湧いてきた。車が動き始める。真優は静かになったケージを支えながら、遠ざかっていく慎也の姉を見つめていた。

6 いまは納得

「真優」

慎也の姉の姿が見えなくなると、慎也が呼びかけてきた。

「はい」

「君の家の方向は？」

はいっ？ 方向を聞かれても……ここがどこかわからないのだから答えようがない。

「さ、さあ？」

「さあ……真優、頭は大丈夫か？」

からかうように言われて、真優は拗ねて彼を睨んだ。

「そういうことじゃありませんよ。ここがどこだかわからないから、答えられなかっただけです」

「そうか、それじゃ住所教えて。ちょっと車を停める。ナビに登録して走ることにしよう」
慎也は車を路肩ろかたに停めた。そして真優の住所をさくさくと登録する。

わたしの住所を登録したことは、これからわたしの家に向かうってことだよな？

送ってくれるわけじゃないよね？ リンちゃんのお世話をするんだし……わたしは二週間、慎也さんの家に泊まって……あ……ああ、なるほど。わたしの荷物を取りに行こうとしてるのか。

「ここか？」

「はい。わたしの駐車場、その先の右側にあるので」

「君の駐車場？ 君、車は持っていないんじゃないのか？」

「将来のために借りているんです。あとからでは借りられなくなるかもしれないって聞いて……それに、両親が来たときにも使えるので、いまも無駄にはなっていませんし」

「へえ」

車が停まると、真優はすぐにドアを開けた。

「それじゃ、荷物取ってきますね」

彼女が車から降りると、慎也もドアを開ける。

「一緒に行ってもいいか？ 無茶な頼みを聞いてもらったんだ、荷物を運ぶ手伝いくらいさせてもらいたい」

「それじゃ、お願いします」

有り難く申し出を受け入れ、慎也と部屋に向かう。

肩を並べて歩き始めると、必要以上に彼を意識してしまい、鼓動が速まる。

ついさつき出会ったばかりなのに、あり得ないほど接近していることがおかしい。

「綺麗にしてるな」

玄関先から真優の部屋を眺めて、慎也が言う。彼は部屋に上がってくるつもりはないようだ。真優は急いで荷造りをした。

月曜日からは、会社の送り迎えもしてくれるらしい。なんだか、至れり尽くせりだ。不安の種だったリンは、いまは拍子抜けするくらいおとなしくしている。リンの世話をするなんて、絶対無理だと思っていたけど、懐いてくれそうな気がしてきた。にゃんこシッターも案外楽勝かもしれない。

「あの、かなり遅くなっちゃいましたけど、慎也さんのところにいるひと、怒ってないでしょうか？」

慎也の家に向かいながら、いまになって先ほどの電話の女性が気になってきて、真優は尋ねてみた。

慎也は恋人ではない、とはっきり言っていたけれど……簡単に、泊まってくれと言えるところから察するに、彼女とは相当親しい間柄のようだ。

なんだか胸がざわついてきて、真優は顔をしかめた。これって……なんだろ？

「そんなことは気にしなくていい。色々頼み事をしておいたから、忙しくて遅いとか気にしてるヒマもないだろ」

そういうえば、意味のわからない言葉を羅列したあと、部屋を片づけといてくれと頼んでいたっけ……

もしかして、わたしがこれから使わせてもらう部屋を片づけてくれるのかな……

「あの、そのひとと話していたとき、慎也さん、暗号みたいな言葉を使っていましたけど……あれは？」

慎也の横顔を見つめ、返事を待つ。

「そうだな……君が、俺が口にした暗号を正しく記憶していたなら、教えてやってもいい」

ずいぶんと楽しそうに言う。

「えーっと……ミッシヨン……」

そこは覚えているのだ。慎也を窺うと、彼は感心したような表情をする。

「すごいな。それで？」

「……それだけです。あと……ロン……とか、リンとか……口にしていたように思うけど……」

「素晴らしく、惜しいな」

慎也は小さく笑う。

「笑わないでください。それで……教えてくれないんですか？」

「いまは……ごめん。教えられない」

「いまは……ですか？ それって、いずれは教えてもらえるってことですか？」

「そうだな。いずれは……」

どうやら、いまはそれで納得するしかないようだった。でも……気になる。それに慎也の家で待っている女性のことも……

「本当にわたしが行ってもいいんですか？」

「どうして？」

「どうしてって……その……慎也さん、恋人ではないと言いましたけど……急に泊まってくれなんて頼める間柄というのは、かなり特別な相手としか思えないから」

「特別な相手なんかじゃない。君が俺のところに安心して泊まれるよう、無理をきいてもらったんだ」

慎也はきつぱりと言い、さらに続ける。

「おかしな誤解をさせないように、君のことは、リンの世話をするために来てくれたって、ちゃんと説明するから」

その言葉に、なぜかショックを受けている自分がいて、真優は首を傾げた。

おかしな誤解をさせないようにというのは、つまり自分たちは恋人同士ではないと説明するということ……

「真優？」

黙り込んでいたら、慎也が真優を窺うように話しかけてきた。

「そのひと、そんなに猫アレルギーがひどいんですか？」

真優は話題を変えた。

「ああ、ひどい。残りのやつらも、あまり動物と親しむタイプじゃない」

残りのやつら？ あっ、そうか……

「まだ、ひとがいらっしゃるんですね」

「今日はもういない。次に来るのは月曜だ」

それって、仕事関係のひとたち……なのかな？ さっき、お姉さんが引きこもってばかりいるって言ってたし……慎也さんの仕事は自宅でできる仕事なのかな？

「あ、あの……慎也さんって、どんなお仕事してるんですか？」

「どんな仕事してると思う？」

聞き返されて、真優は改めて運転している慎也を見つめた。

「そうですね」

整った顔立ち、スリムな身体。髪は……ちょっと長いかな。

性格は、ほんのちよつとだけ俺様な感じかも。

「会社勤務の、サラリーマンじゃなさそうです」

「当たり前だ」

楽しそうに返してきたが、慎也はそのまま口を閉じてしまう。

なんの仕事をしているのかも一度聞こうとしたそのとき、車が停まった。

「着いたぞ」

「こ、ここですか？」

洒落た外観のマンションを見上げ、真優は目を丸くした。

7 後回しにされた謎

「さすがに一度に運ぶのは無理だな」

「ですね」

車に積まれている荷物を見て、真優は頷く。

「君は、自分の荷物を持っていくといい。俺は、まず、リンを連れていく」

真優は自分の荷物を取り出し、慎也はリンのケージを抱える。

エレベーターに乗り込み、真優は目の前にある慎也の背中を見つめた。

男のひとの背中なんて、社内で見慣れているのに……慎也さんの背中って、見ているだけでドキドキする……それに、ちよつと触れてみたいかも。

そんなことを考えていると、ふいに慎也が振り返ってきて、真優はビクンと身を竦めた。

「荷物……うん？ 真優、どうした？」

「えっ？ な、何がでしょう？」

「いや……」

訝しそうな眼差しを向けられ、目が泳いでしまう。

「君って、動揺が手に取るようにわかるな」

「は、はいっ？」

「嘘、つけないだろ？」

そんな指摘を受け、返事に窮していると、エレベーターの扉が開いた。真優は会話が中断されたことにほっとしつつ、慎也のあとに続いた。

「荷物重くないか？」

振り返って聞かれ、首を横に振る。

「大丈夫です。というか、わたしより、慎也さんのほうが重そうです。リンちゃんのケージ」
リンは眠ってしまっているようだ。慎也の姉と別れてから、気味が悪いほどおとなし

くなつたリンが、真優は逆に心配になつてくる。

「まあな。こいつは軽くはない。リンには食事制限をさせるべきだと思うんだが……」
 「ノルウェージャンフォレストキヤットは、大きくなるんですよ。リンちゃんは……女の子にしてはかなり大きいですけど」

「女の子じゃない」

「は、はいっ？ まさかリンちゃんって、男の子だったんですか？ でも、名前が……」
 「普段はリンって呼んでるけど、本当は凛太郎っていうんだ。ちなみに、凛々しいの凛な」

「そ、そうだったんですか。なら、その大きさも納得かも」

慎也が、あるドアの前で足を止めた。

「真優、インターフォン押ししてもらえるか？」

「ああ、はい」

右手に持っていた荷物を床に置き、真優は急いでインターフォンを押した。だが、応答がない。

「青井のやつ、何やってんだ」

アオイさん？ 彼女の名前、アオイっていうのか？

そっか、慎也さんって、彼女のこと名前も呼んでるんだ。

自分だけではないと知って、なんだかシュンとしてしまう。

「真優、インターフォンを連打しろ」

苛立った様子で慎也に指示され、真優は三回連打した。

「もっと！」

さらに言われ、慌てて押そうとすると、やっと返事が聞こえた。

「はい、はい」

「青井、俺だ。遅いぞ。早く開けろ！」

「はい」

するとドアが勢いよく開けられた。

「おっかえりなさ〜い。あなたくん……うっわわっ！」

甘え声が一転して、叫び声に変わった。

「な、なんで猫？」

「青井！ 落ち着け」

慎也がなだめたが、青井は女性とは思えぬガニ股で後ずさり、距離を取った。

「ボス！ これ、どういう、クツ、クシヤン。クシユン、クツシヨン」

「器用なくしゃみをするもんだな。青井」

「猫なんて連れて……クツ、クシヨン！ くるから……ハッ、ハッ、ハッ、ハックシヨン！ ……でしょうがぁ」

青井は身に着けているピンクのエプロンで顔を覆いながらくしゃみを繰り返し、鼻水を嘔^{えず}っている。真優は気の毒になってきた。このひとの猫アレルギーは、かなり重症のようだ。

「そこまでひどいとは思わなかった」

「うう……さ、最悪だあ。ぐすつ、ぐすつ。僕、もう帰らせて……ハックション……もらいますからね」

はいっ？ 僕？ いま、このひと、僕って言った？

真優は戸惑いながら、ド派手なワンピースにピンクのエプロンをしている青井を見つめた。

整った顔立ち。つやつやのストレートの長い髪だが……

「わかった。もう引っ込んでくれ。部屋は片づいているのか？」

「片づけたよ。まさか猫と一緒に帰^{かえ}るとはね。最悪！」

超不機嫌な声で怒鳴る。見た目はどこからどう見ても女性なのだが、声は男性のものとしか思えず、真優は困惑した。

「いい？ ふたりとも。猫はその部屋にさっさと入れて。奥に来る前に、シャワー浴びて着替えてきて。絶対そのまま来ないでよ。じゃないと、僕、このまま帰るからねっ！」

「僕……ね」

慎也が冷ややかに口にした。すると青井は、しまったというように顔をしかめた。

「は、流行^{はやり}なんだよね。女の子が僕って言うのが、かわいってさ。てへっ」

自分の頭を拳^{こぶし}でコツンと小突き、小さく舌を出す。その仕草はかわいらしいのだが……真優の戸惑いの視線を受けた青井は、「そ、そんな、シャワー頼むよ」と早口で言うのと、あつという間に姿を消した。

玄関先に突っ立っていた真優は、慎也と目を合わせた。彼は気まずそうにしている。

「君が……その……安心かなと思ってね。ここに泊まるのに、女の子がいたほうが……」

「えっ、でも……」

「——白状する。青井は女じゃない」

「ですよね」

「すまない」

頭を下げる慎也を見て、真優は噴^かき出した。

「笑ってくれるのか？ 怒っていない？」

「だって……でも、アオイって、名前なんですか、それとも苗字？」

「苗字だ。青色の青に井戸の井。名前は康弘^{やまひろ}」

青井康弘さんか……なんか女性の格好をしているから、まるでしっくりこない。

「でも、綺麗なひとですね。女のわたしより何倍も」